

西区の主婦殺害 25年

「くじけぬ」夫の執念

名古屋市西区で1999年、主婦の高羽奈美子さん（当時32）が殺害された事件は、未解決のまま13日で25年を迎えた。夫の悟さん（68）は情報提供の呼びかけや、時効撤廃への活動など事件解決に執念を燃やしてきた。一方、どこかで見ていたかもしれない犯人に悲しむ姿を見せまいと親子で元気に暮らしてきた。犯人に告ぐ。「さまあみろ。おまえが期待するほど、俺たちはくじけてないぞ」

（水谷元海、伊勢村優樹、森本尚平）



高羽奈美子さん

「事件後、23、24、25年 たっても心境が変わらない。犯人が枕を高くして寝られないように活動を続ける」。13日、同区の商業施設



情報提供を求めるピラを配る高羽悟さん＝13日午前、名古屋市西区で

で捜査員らと事件内容を記したピラを配りながら、悟さんは強い決意を述べた。10月23日、事件現場となったアパートへ、事件後に採用された西署員ら6人を招いた。玄関のたたきに犯人のものともみられる血痕が今も残り、室内の家財もほとんどが当時のままだ。事件後、同市港区の実家に引っ越したが、アパートはずっと借り続けてきた。支払った家賃は2千万円を

超える。すでに退職しており「年金生活で何年持てるか分からない」。それでも今も手放す気はない。「現場を見た署員が、普段から『犯人が近くにいるかも』と注意深くなんてほしくて」と期待する。

原動力となってきたのは、奈美子さんが殺された時に現場にいた当時2歳の長男航平さん（27）だった。「彼が大人になった時、『お父さんは何もしてこなかったの？』と言われるのが怖かった」と悟さんは言う。

全国の未解決殺人事件の被害者遺族らでつくる「宙の会」（東京）に2009年の設立当初から参加し、翌年に会が求める殺人事件の時効撤廃を実現させた。

犯人へ 悲しむ姿見せない

メディアの取材にも積極的に応じてきた。初めてテレビの取材を受けた時。「泣いているところは撮らないで」。意識したのは、画面の向こうで見ていたかもしれない犯人。もし奈美子さんへの恨みが犯行動機とすると、家族が苦しんでいる姿は犯人を喜ばせるだけと考えた。「親子で楽しく暮らしているところを見せてやりたい」。事件解決に向けた活動や仕事の傍ら、航平さんの学校行事にほぼ参加。事件とは無縁のような普通の暮らしをしていこうと思ってきた。

航平さんも明るく育った。高校の卒業式で卒業生らが胸に挿すバラを口にくわえて登場した。「ちょっと元氣過ぎるくらい」と悟さんはほほを緩める。航平さんは市内の大学へ進学。就職を機に東京に引っ越し、独り立ちした。

理不尽に屈せず、胸を張れる人生を過ごしてきた親子。「テロみたいなことをされても、ちゃんと、しっかり生きてきた」。悟さんは今も身を潜めている犯人に対して、そう伝えられると思っている。



QRコードから今の事件現場の様子

愛された記憶 失われ

宙にいる母へ

名古屋主婦殺害

長男の25年

男児は何が起きたのか理解できないまま、大人用のいすにちよこんと座り、食卓の上にある車のおもちゃで遊んでいた。1999年11月13日午後、母の主婦高羽奈美子さん(32)が首を刺されて亡くなっていくのを、訪ねてきた近所の夫婦が見つけた。奈美子さんは居間の入り口付近で倒れており、男児とは2メートルほどしか離れていなかった。

男児は当時2歳の長男の航平さん(27)。奈美子さんが発見された時、テレビがつけっぱなしのアパートの部屋で泣いていなかったが、犯行を目撃していたとみられる。

事件後すぐ、名古屋市港区にある父の悟さん(68)の実家に移り、父や祖父母と生活した。凄惨な場面がよみがえる恐れがあるとの理由で、1年半ほど精神科医のカウンセリングを受けた。航平さんは当時の記憶を失っていた。3歳になって、悟さんと愛知県警による現場検証に立ち会い、事情も聴かれたが、何一つ思い出せなかった。「覚えていたなら、犯人が捕まっていたのかな。もし捕まっていたら、どういう人生になっていただろうか」。事件が解決されていない状況に、25年たった今も、複雑な表情を浮かべる。

悟さんは「当時、奈美子は幸せの絶頂だった」と振り返る。マイカーを購入したばかりで、新築の分譲マンションにも契約。夫婦で

上 犯行目撃



長男航平さんの成長を記録した高羽奈美子さん手作りのアルバム＝名古屋市港区で

「そろそろ、2人目がほしいね」とも話していたという。だが航平さんには母の記憶がない。「真っ白」。写真のほか、ディズニーランドやアパートで、飯を一緒に食べる様子を収めたホームビデオを通じてしか、母の愛を確かめることができなかった。

小学校に入り、母のいない寂しさを味わった。休日に外出しても父と2人だけ。学校で友人が自分たちの母親を話題にすることが嫌だった。「あの時はつらかった」。だが素直な思いを当時、父に打ち明けることはほとんどなかった。これまでの取材を通じ、ど

こかで見ているかもしれない犯人に対し、2人は明るく、くじけずに暮らしている姿をアピールしてきた。記者から「お母さんがいなくて大変だね」と質問されても、困った表情をするだけだった。悟さんは「私に気を使っていたからだろう」と胸中を察する。

名古屋西区主婦殺害事件 1999年11月13日午後2時半ごろ、同区稲生町5のアパートで住人の高羽奈美子さんが死亡しているのが見つかった。現場の血痕や目撃証言などから、犯人は現在60〜70歳ほどの女で、血液型はB型。身長約160センチ、靴のサイズは24センチで、事件で手にけがを負ったとみられる。愛知県警捜査1課や西署が捜査を続けている。情報提供は同署＝電052(531)01110＝へ。解決に結びつく情報を寄せた人には上限300万円の特別報奨金が支払われる。

そんな父の優しさに、航平さんは「寂しさは半減です。両親が行事に来ていないよりは救われていたと思う」と感謝する。しばらくして、父は事件の解決を求める活動を始めた。そして、航平さんも失った母の記憶を埋めるように、父と二人三脚で事件と向き合い始める。

名古屋市区で高羽奈美子さんが殺害された事件は13日で丸25年を迎えた。2歳だった航平さんは27歳となり、親元を離れて今は東京で暮らす。母を失った悲しみ、事件解決に執念を見せる父への寄り添い、そして新たな出会い…。「未解決事件の遺族」として歩んできた航平さんの四半世紀を振り返る。

悟さんは授業参観や運動会などほぼ全ての学校行事に顔を出した。事件でいじめられることがないように、配慮を求める身上書を毎年学校に提出してきた。犯人の殺害動機が分からない中、奈美子さんが犯人とトラブルになっていたのだから、周囲から邪推されるのが心配だった。

父に呼応 事件を直視

宙にいる母へ

名古屋主婦殺害

長男の25年

「お母さん もみじといっしょに 消えてった」との俳句も残っていた。秋に殺害された母の存在が浮かび、この年の初夏に詠んだ作品だ。

15年たった今、あの時の心境はよく覚えていないと

中 迫る時効



「宙の会」の会合で、遺影を前にあいさつする高羽悟さん（右から2人目）と後ろで聞く当時小学生の航平さん（2009年、都内で）

が自然だった。

「母がいないことで、航平がぐれないか」と心配していたという悟さん。00年の東京・世田谷一家殺人事件後に現場を管轄する警視庁成城署長を務め、宙の会設立にも関わった土田猛さん（76）に相談したことがあった。だが、土田さんは悟さん

の時、航平さんは中学生になったばかり。部活動のサッカーに打ち込んだことで帰宅が遅くなり、次第に犯罪被害者の支援などを訴え続ける悟さんと、母を話題にする機会が減っていった。活動に同行することも難しくなった。

宙の会 全国20件の殺人事件の被害者遺族らでつくるグループ。愛知県豊明市母子4人放火殺人事件（2004年）や東京・世田谷一家殺人事件（00年）といった未解決事件の遺族も参加している。宙に「無限の時間」の意味があることが由来で、時効撤廃を求めた。現在、支払い能力のない加害者に代わり、国が一時的に遺族に民事訴訟の賠償金を支払う「代執行制度」の確立を訴えている。

「あの子はお父さんを裏切るようなことは絶対にしない」。根拠は会の会合で悟さんが話す時に見せる真剣な姿だった。土田さんは「お父さんの犯人逮捕への信念と、息子を育てるという気構えを航平君は受け止めていた」と述懐する。

10年4月に会の署名活動などが実を結び、殺人罪の公訴時効を撤廃する改正刑事訴訟法が施行された。母の事件も区切りがなくなることになった。ちやうどその時、航平さんは中学生になったばかり。部活動のサッカーに打ち込んだことで帰宅が遅くなり、次第に犯罪被害者の支援などを訴え続ける悟さんと、母を話題にする機会が減っていった。活動に同行することも難しくなった。

父が話し始めた瞬間、携帯ゲームで遊んでいた少年の手は止まり、真つすぐ前を向いた。2009年、都内であった未解決殺人事件の遺族らでつくる「宙の会」の会合。母の高羽奈美子さんを失った長男の航平さん（27）が同席し、父の悟さん（68）による殺人罪の公訴時効撤廃に向けた訴えに聞き入っていた。その時、小学6年。母の事件も時効成立まで5年に迫っていた。

当時の本紙の取材に「時効はなくてはほしい。悪いことをしたのに、犯人が捕まらないなんて、悲しいから」と心の内を語っていた。国語の授業の課題に

住宅メーカーの営業の仕事と子育てに追われながらも、母の事件への情報提供を求め、ピラを配り続ける

恨みなく妻と生きる

宙にいる母へ

名古屋主婦殺害 長男の25年

「この人と付き合っているんだけど」。殺人事件で母の高羽奈美子さんを失った長男の航平さん(27)は高校1年の時、父の悟さん(68)に交際相手の名前を伝えた。悟さんは驚き、鳥肌が立ったことを覚えてい

る。事件から25年という節目の今年、航平さんの人生に大きな転換期が訪れた。今月11日に高校時代の同級生、咲月さん(27)と入籍した。2人が交際を始めたのは高校時代だ。だが、実は0歳の時に会っていた。咲月さんの母は奈美子さんの友人。事件前から家族ぐるみの交流があり、年賀状のやりとりも続いていた。2人はそんな不思議な縁を知らないまま、引かれ合っ

奇跡の縁

下



高羽奈美子さんの遺影と写真に納まる航平さん
(右)と咲月さん(左)名古屋市内で(悟さん提供)

届いた。「25年間、頑張ってきたご褒美かな」と笑った悟さんは仏前に「奈美子、無事に友達の娘さんと結婚できたよ。ありがとう」と報告した。

現場近くで目撃された女の推定年齢は当時40〜50歳くらい。犯人のDNA型も検出され、逮捕が期待される未解決事件として、注目されてきた。しかし、時間がたちすぎた。「生きていても70歳くらい。今さらそんな人が捕まったところでどの思い。今のままでも良い」と航平さんは話す。

事件が解決し、母に何があったか知りたい気持ちはある。ただ犯人に恨みを抱えながらではない。母の写真を飾った自宅で、多くを理解してくれる妻との人生を大事にしようと思っている。

(この連載は伊勢村優樹、森本尚平、水谷元海が担当しました)

ためて説明する必要がある。「奇跡。本当に気持ちいいが楽です」

祖父父母の支援を得ながら父が精いっぱい働いたおかげで、高校と大学は私立に通えた。今は東京で暮らしながら、広告関連会社で深夜近くまで働く。事件後、父から愛情を送り続け、充実した生活を送り続ける中で「犯人への恨みが出てこなかった」と言う。

今も、父が代表幹事を務める未解決殺人事件の被害者遺族らのグループ「宙の会」が、都内で開く会合の設営を手伝う。だが事件現場となったアパートを借り続け、事件解決に執念を燃やす父について「納得するまでやればいいが、僕にはそこまでできない」と考えている。

事件とは関係のない、さまざまな人との出会いを通じて、今の自分があると感じている。「普通に人並みな